

「それは……本当なのですか？」

仕事の為ではなく、趣味と実益の追及の為に構築された、寝室の壁の一面を埋め尽くすモニター群——横四列、縦三段に積み重ねられた二〇インチ液晶ディスプレイの一つに開かれたウインドウの情報を見るなり、男の目はそれまで慌ただしく他の一一のディスプレイの間を歩き来する片手間のチラ見程度にしか見ていなかったそのディスプレイへと集中された。

『本当ですよ、佐藤さん。念の為複数の調査方法で試算を行ないましたが、“彼等”の存在がそちらの時空世界の許容し得る存在エネルギーの飽和点を越えるのは後——』

PCを収めたキャビネットの下側に設置した安物のワウンウェイスピーカーから流れて来る、妙に変調の掛かった相手の声を聞きながら、通信回線の向こうにいる音声チャットの相手から「佐藤」と呼ばれた男は「うーん、これは困った……」と、微妙な銘柄を吟味する時よりも更に深刻な表情を浮かべ、腕組みをしながら次々送られ

て来る、先方によってpdfファイルに纏められた資料を睨みつけて本当に困った表情を浮かべながら呟いた。

『佐藤さん？』

「ああ、はいはい、聞いてますよ」

本人はほんの僅かな時間そうしていたに過ぎないつもりだったらしいが、実際にはたっぷり五分近くもディスプレイを見ながら考え込んでいたらしい。

佐藤からの反応が途絶えた事を怪訝に思った先方がコールをして来たため、それで佐藤も我に返ると再びキーボードのわきに備えつけてある音声チャット用のマイクに向き直る。

『……それで、ですね、究極的にはイレギュラーな存在である“彼等”をその時空に留め置く事はいざれ不可能になるのは間違いない事実なんです、何らかの方法で一時的にでも“彼ら”の持つ膨大過ぎる存在エネルギーを棄てる事が出来れば、その時期を先延ばしにする事は可能な筈なんです』

「それで、そちらの試算で先延ばしに出来る——という事

は、我々が“彼等”の送り先として選び得る時空間を捜索するのに使える時間はどれくらいになりそうです？」  
その問いに答えるかのように、更に新たなファイルが転送されて来た。

それを、閲覧用ソフトのアドビ・リーダーで開きながら、ファイルに記された一文を、佐藤は呟くように読み上げた。

「最大で……………一年、最短で半年……………か……………」

その言葉を最後に、回線の向こうの相手に至急こちらでも対策を協議すると伝え、音声チャットを終了させ同時に送られて来た資料を嚴重に多重化されたプロジェクトの掛かったDVD-RAMディスクに保存してクロージングする。

一時pdfファイルのウィンドウの下に隠されていた株式市場の相場動向をリアルタイムに表示しているインターネットブラウザに未練たつぷりの一瞥を投げかけ、多次元監視機構ネットワーク(通称・タイムパトロール)平成世界担当時空監督官、佐藤一郎はハンガーに掛けてあったジャケットに袖を通すと、携帯電話と財布をポケットに押し込みながら慌ただしく何処かへと出かけて行

ったのであった。

「ふあゝゝあ……………あー、世は全て事もなし、平和だねー」

リビングの炬燵にまるまり、完全にだらけ切った調子で卓の上の籠に盛られたみかんを一つ、手元に引寄せながら高町家次女、高町美由希は呟いた。

「ほんとーだね……………最近はこれといった事件もないし、平和が一番……………」

姉、美由希の調子にあわせるかのようにこれまた炬燵にまるまってみかんを齧っているのは高町家の末っ子、なのは。

こうみえてこの二人、姉は御神流小太刀二刀術の実践剣士、妹は時空管理局の幹部候補生とバリバリの「武闘派」なのだが、昨年末に『闇の書』事件が片付いた後はこれといった事件もなく、あるのは精々なのはでなくともどうにでも出来るような些細な事件や月村忍とシグナムの「チキチキ！恭也兄さん争奪・恋の無制限大バトル」(八神はやて命名。尤も、一本勝負と言いながら決着付

かずのまま温泉卓球やらダンスゲーム勝負やらの不毛な戦いがもうかれこれ二〇番近く行われたらしいが時たま発生するくらいで、朝晩の鍛錬を除けば今はふたりともごくごく平凡な女子高校生と小学生ライフを満喫している真つ最中であつた。

おまけに、今日は三連休の中日とあつて特に何かをする予定もなくひたすら自宅でごろごろ……

ああ、かつて彼女たちに血祭りに上げられた連中が見たら泣くぞ、この光景。

だが、そんな細やかな平和を間もなくぶち壊しにする事件がすぐそこまで迫っているとは、この時点では美由希もなのも全然気付いてはいなかつた。ただ——

「いい若いもんが昼日向ひなたからなにをしている……」

「げっ！ 恭ちゃん！」

「お、おにーちゃん……そ、そだ、折角だからおにーちゃんも一緒にみかんでも」

自分だつて二〇をいくらも過ぎていないにも拘らず、妙に老成した調子でリビングに顔を出した高町家の長男、恭也が溜め息を吐きながらそう言うと、トレーナーとどてらと炬燵布団で着膨れたペンギンのようになってい

妹たちの姿を等分に眺め渡し、改めてもう一度溜め息を吐き、無情なる一言を告げたのだつた。

「ふたりとも、そんなに暇なら少し走り込みランニングにでも付き合え。ほんの一〇キロも走れば寒さなんか忘れられる」

——細やかな不幸なら、いついかなる時も出番を待つてすくみた直傍らすくみたに控えていたのであつた。

「……と、言う訳で皆さんにはちよつと機動艦隊と打撃艦隊の全力出撃をもらう事になりました」

所変わつて、ここは伊豆いずは伊東市内いとうのとある高級温泉ホテル。ただし、今はその頭に「元」が付き、変わつてある組織の本部がわりにされているが。

その元温泉ホテルの一室、以前はダイニングルーム、今は会議室として使われてる大広間の一つで、こちらは日曜返上で幹部会議の真つ最中であつた。

「あり、えーと佐藤さん、『と、言う訳で』と言われてもなんの事やら全然解らないんですけどおー」

コの字型に配された会議テーブルの一角で、年齢不相応だいきな大佐の階級章を付けた若い男が大欠伸あくびと拳手を同時にか

ましなから、退屈極まりない調子で発言した。

冒頭のやり取りのちようど一〇時間くらい後、関係する政府関連のあれやこれやと協議を終えた佐藤はその足で伊東入りすると、日曜日の朝っぱらから当事者であり関係者である連中を会議室に招集し、臨時の会議をおっぱじめたのである。

「おや、今の説明で解りませんでした？」

怪訝な表情を浮かべながら、佐藤は、発言者——寺中てらなか雪之丞ゆきのじょうの方に体ごと向かい合い、言った。

「いやだって、いきなり』と、言う訳で』なので説明も何も無かったよーな気がするんですけどー」

聞きようによつては（よつてなのか？）あまりに間抜けそのもののやり取りの後、一瞬だけ視線を天井の蛍光灯に這わせた佐藤は、「ああ、ああああ、あー」と自分で勝手に何事かを納得してポンと手を打つと、「そーいや今回は作者が違うし本編じゃないから都合よくト書きで説明無いんでしたねー」と、誰に言ってるのか謎の科白を残して改めて手元のファイルを取り上げた。

その様子を見かねたのか、朝っぱらから叩き起こされて不機嫌極まりないのか（無論、実際はその両方に決ま

ってる）、上座に座っている老人——旧日本帝国海軍Nの第一種軍装とよく似ているが、微妙に細部の異なる制服に、何と首元に四つ錨の元帥の階級章（ちなみに、旧帝国土海軍では元帥は称号であつて階級ではない、よつて元帥号を受けたものでも階級それ自体は大将に留まつている為、元帥の階級章と言うのは存在しない）がこれでもかと自己主張をしている——が、

「ああもう、えーからさつさと本題に入らんかい、儂や長つたらしい話は嫌いなんじゃー」

と、いかにも邪魔臭そうに、嫌味たつぷりな様子で吐き捨てた。

その様子に、あーこりややばいと感じた佐藤、出てもいない額の汗をハンカチで拭いながら、今度こそ本当に説明を始めたのであつた。

「あく、つまりですね、既に皆さんにはご存じだとは思いますが、時空世界それぞれには時空エネルギーの受け入れの限界がある訳ですね、でもって、我々がいるこの『平成世界』はその中でもかなりエネルギーキャパの大きい世界で、だからこそ皆さんみたいな非常し……おつともとい、特殊な存在感、つまりエネルギーの塊みたい

な集団を受容する事が出来た訳なんですが、それが最近、ちよつとしんどい事になってきてるんですよ」

「と、言いますと？」

「あ、要するに皆さんが出撃しては行く先々で略だ……もとい、時空歴史遺産の保護活動に邁進された結果、皆さんが出撃した先々のあれやこれやが物質に付随するエネルギーとなつてこの世界にじゃんじゃん流れ込んだ上、その合間合間に行われた装備改変の結果、皆さんの艦隊自体の存在エネルギー自体がうなぎ登りに増えちゃつてるんですよ。な、もんだから……」

「このまま放つておくと、いずれこの世界の許容出来る時空エネルギーの限界を越えてどばくとエネルギーが溢れ出してしまつて訳ですね、うくん、これは困りました」

佐藤の説明の後を受けて、ジト目で上座の老人を睨みながら参謀飾緒と中将の階級章を着けた鬚面の男が、心底困つたように呟いた。

「なんじやいなんじやい、全部は儂が悪いつづくんかい」

当然、そのジト目の示す意味に気付いて途端にただでさえ悪い機嫌を更に悪くする上座の老人。

「んな事言つてませんよちよーかん。ただ、もうちよつと長官がいつもの欲張りとしてしゃばりを抑制すれば……」

んな事出来る訳ねー。つか、それが出来たらそもそもこの老人、つかクソジジイがクソジジイたる由縁が無くなつてしまう。

それは鬚面の男も重々承知の上で、それでも敢えて言つてみた、と言うか毎度の事なので言わないと気がすまないだけに過ぎなかつたので、更に長官と呼ばれたクソジジイが何かを言いだす前にさつさと、続きをどーぞと佐藤を促したのだった。

「はいはい、で、ですから、今回は国連時空遺産保護機構ではなく、我々タイムパトロールの要請に基づく出動と言う事で了解してもらいます。幸いにも、出撃していただく先の時空はこの世界とほぼ同じ——時間的誤差すらない二〇〇x年二月の日本ですから大した予備知識も不要なら、その世界の方がこの世界より存在エネルギーの受容量の限界が高い世界なので、皆さんが少々暴れまくつてもどうという事はありません。な、もんでその世界で精々派手に暴れてちよつと存在エネルギーを減らして来てもらいたい、という訳なんですよ」

惑の幕が——今、まさに上がろうとしていたのだ。

おいおい、ちよつとまで。

今、佐藤、さらつととんでもない事を口にしたぞ。

存在エネルギーを薄める為に、ちよつと逝く……じゃ

ない、行く先で派手に暴れてきてくれ、だつて？

それって、その「暴れられる時空世界」にして見たら

とんでもない傍迷惑はためいわくを被る事になるんじゃないやあ……

もつとも、その事を口に出して問い質すものはどこに

もいなかった。

何故なら——

そう、彼等は既に十分以上に百万世界に十分過ぎるほ

どの傍迷惑——というより大厄災——を撒き散らして来

ただのだから。

ちなみに、このクソジイの姿をした大魔王事、大官だいかん

寺重蔵元帥じじゅうざうに率いられた時空を駆ける大厄災集団の名を、

「独立愚連艦隊どくりつぐれんかんたい」という（本当は「特務実験艦隊」が正

式名称なただけど、誰もそんな事もう覚えちゃいねーし）。

そしてここに、時空クソを駆ける大魔王とその眷属けんぞく、白い

悪魔とその仲間たちによる時空を越えた史上最大の大迷